

## 第11回 ふくまる夢たまごセミナー〈閉塾式〉

日時 平成31年2月15日（金）18時～20時

場所 市庁舎7階 大会議室

内容 閉塾式及び記念講演

○閉塾式

- ・教育委員会あいさつ（田淵教育長）
- ・一年間を振り返って（塾生ひとり一言）

○記念講演

演題：「教師という仕事」について

講師：明石一朗氏（関西外国語大学教授 人権教育思想研究所長）

2月15日、今年度も無事に「ふくまる教志塾」の閉塾式及び「ふくまる夢たまごセミナー」の最終日を迎えるに至りました。

今年度は、37名の塾生（現場実習生28名、聴講生7名、特別聴講生2名）でスタートしましたが、途中入塾者が1名ありましたので、最終的には「ふくまる教志塾8期生」は38名でした。

今回の最終セミナーには、24名の塾生が出席し、閉塾式と記念講演に臨みました。

閉塾式では、「ふくまる塾長」の立会いのもと、田淵教育長より塾生のみなさんに1年間のねぎらいと励ましの言葉を、次のようにかけていただきました。



<教育長のお話の要旨>.....

ふくまる教志塾第8期生のみなさん、こんばんは。

今年度も、池田市で教員をしたいというみなさんを対象に「ふくまる教志塾」を実施してまいりました。

「ふくまる教志塾」では、池田市内の小・中・義務教育学校に実習に行ってください「児童・生徒支援の体験（現場実習）」と「教員養成講座（セミナー）」の2本柱で実施しましたが、皆さん方は、8期生として、無事に、本日閉塾式を迎えることとなりました。

大阪府教育委員会から人事権の移譲を受けて7年目になります。教員の養成と採用の一体化に向け、この教志塾の存在は大きく、期待もされております。是非、みなさんには豊能地区、とりわけ池田市を希望してほしいと強く願っております。

現在、池田市の小・中・義務教育学校では、50名を超える「ふくまる教志塾」出身のみなさんが、教員（講師を含む）として、活躍してくれています。これからの新しい「池田の教育」を築いてくれるのはみなさんだと思っています。

本日は、明石一朗先生に記念講演をしていただきますが、みなさんにとってたいへん有意義なお話が聞けるものと思います。

みなさん、一年間お疲れ様でした。来年度も仕事に勉強にがんばってください。みなさんのがんばりを心から期待しています。

.....

その後、出席した塾生のみなさん一人ひとりから、ふくまる教志塾での1年間を振り返り、一言ずつ感想を発表してもらいました。教志塾での学び合い、励まし合い、語り合いなどを通し、「教師になりたい」という同じ思いを持つ塾生同士のつながり（共通する悩みや喜びを共有しあえたこと）の素晴らしさを多くの塾生から聞くことができました。



記念講演は、関西外国語大学教授の明石一朗先生に「『教師という仕事』について」というテーマでお話をいただきました。



はじめに、子どもが望むいい先生とは、「明るく元気で、優しくもあり厳しく、どの子にも公平で、えこひいきせず、知的な先生」であると話されてから本題に入られました。

講演の内容は以下のとおりです。

(配布されたレジュメより)

## 「教育という仕事」について

関西外国語大学 明石一朗

- 人間味。(人間味とは人間を「肯定」的に捉えること)
  - ・ 教育は、教科指導だけでなく子どもの人格的発達をめざす
  - ・ 子どもたちとの「信頼関係」が前提。医師と教師の3つの共通点
  - ・ 感情労働の仕事。一般的には、相手の気持ちをくみ取る対人サービス労働
- 職場の絆
  - ・ 目的と役割分担と仲間意識
  - ・ 教師集団の結束は、「子どもの良さ」にこだわり共有すること
- 教師のやりがい
  - ・ 子どもの笑顔、保護者・地域の信頼、仲間の励まし
  - ・ 「子どもがかわいい」と思い続けられること
- 教師は現場で鍛えられる
  - ・ 本当の理解は経験・体験を通して得られる。3つの教師力
  - ・ 指導に力のいる子どもは「宝」
  - ・ 学習の遅れがち子ども、心身に障がいのある子ども、家庭的に課題のある子どもの気持ちがわかる先生に
- 「優しさ」と「厳しさ」の統一
  - ・ ほめること
  - ・ 叱ること

## ○人間の「先輩」として

- ・よく学ぶ先生がよく教えることができる

※コンラート・ローレンツ博士（オーストリアの動物行動学者：ノーベル賞受賞者）

「人間は、自分の好きな人、しかも尊敬する人からのみ文化・伝統を受け継ぐことができるようになっていく」

- ・日々、心身の安定感を（自己管理、食事・運動・睡眠等）
- ・人間的な暖かさと協調性を（ユーモア・気配り）
- ・社会的な常識と責任感を（あいさつ・返事・身のこなし）

## 1. 教員をめざすみなさんへ

- ① 日本の国語教育を牽引してきた大村はまさんは、  
《教師のあるべき姿と子ども》について、次のように述べています。

教師たる自分は、最高の自分でなければならない。教師というものは勉強しなくてはならない。研究することは「せんせい」の資格である。

子どもとは、『身の程知らずに伸びたい人』のこと、一歩でも前進したくてたまらない。力をつけたくて、希望に燃えている、その塊が子どもである。

※「教えるということ」共文社 大村 はま（1906年 - 2005年）

- ② 保護者の子どもへの共通の思いは、「元気で、かしこく、やさしく、人に迷惑かけずに、大きくなって食いはぐれのないこと」です。子どもの自己実現と社会貢献、そして、将来の経済的自立を望んでいます。

「教員に関する意識調査」によれば、保護者が望んでいることの中で、最も多いのは「教育への責任感や使命感」（68.7%）、次いで「非行やいじめなどの問題行動への適切な対応」（58.0%）、「社会人としての一般常識」（50.8%）、「公正・適正な評価・評定」（49.7%）、「授業力や教科などの専門知識」（45.7%）などの順になっています。

意外にも保護者が教員の専門知識に期待する割合は50%以下で、それよりも責任感や使命感、一般常識など、大人のお手本として、子どもたちを指導してほしいというのが保護者の本音のようです。

- ③ ほとんどの教員は、大学などを卒業後、新任教員になるか、非常勤講師を経て

採用された人が大多数です。ある意味、学校という職場しか知らないで、世の中の「常識」とかい離する傾向もあります。20歳代で「先生、先生」と呼ばれ、知らないうちに謙虚さを失い「独善」や「傲慢」が芽生えやすい職業でもあります。

- ④ 教育職は、子どもの「命」に向き合い、日々の成長を促す崇高な職業です。常に謙虚で誠実であってほしいと願います。そのためには、「日々初心」の構えで子どもや保護者、教職員と接し、信頼的人間関係を築くことが大切です。本学の教職課程を履修するみなさんが、子どもたちが「私は、〇〇先生が大好き！」と言ってくれる、そんな素敵な先生になってほしいと願っています。

## 2. あるべき教員像について

### ① 豊かな人間性

単に子どもが好きということだけでなく、子どもたちは、一人ひとり様々な生活背景を背負い、学ぶために(賢くなるために)、そして友だちと仲間としてつながるために学校に通う。その子どもたちの思いを大切に受け止め、共感し、ともに歩いていく教師が求められます。

子どもたちは、純粋で心優しい面を見せるかと思うと、手がかかり、実に残酷なこともあります。それでも子どもが好きだと思え、無限の可能性を追求する教師であってほしいです。

教育は、結果がすぐに出ないときのほうが多いですが、児童生徒のためだと思って指導するのが教師の姿です。



### ② 実践的な専門性

教科指導で言えば、中学校や高等学校の教科専門性も大きく、また、基礎基本を教える小学校の教師は大変思い責任を負っています。ひらがな・計算だけでなく「広い」「重い」という概念や、美しい言葉、まだ見ぬ地域、歴史という過去の出来事などを学び、道徳や特別活動で仲間とともに生き方を考え、学びの「第一歩」を小学校教育は担っています。

教師の指導は専門性に裏打ちされたものでなければなりません。それは教科指導だけでなく生徒指導も教師としての専門性が要求されます。

### ③ 開かれた社会性

教師は、何よりも子どもとのコミュニケーションを大切にし、保護者の思いも丁寧に把握しながら指導していくことが重要です。そのためには、子どもや保護者との信頼関係を築く社会性を身に付けなければなりません。

また、「開かれた学校づくり」に率先して取り組み、総合的な学習の時間等、様々な取り組み（地域学習や職業体験、昔の遊び、読み聞かせの会等）中で保護者や地域の方々との出会いを持ち、地域と連携していかなければなりません。

以上、ユーモアを交えながら具体的にお話していただきました。塾生のみなさんは、食い入るように聞き入っていました。

1年間のふくまる教志塾の締めくくりにふさわしいお話に、塾生一同、改めて教師という仕事の素晴らしさと責任の重さを実感したようでした。

講演会後は、明石先生とふくまる塾長を囲んでの記念撮影をし、和やかなうちに平成30年度ふくまる教志塾（ふくまる夢たまごセミナー）を終了しました。



## <塾生の感想から>

- 明石先生のお話を聞かせていただいて、子どもの学校外での16時間の暮らしを気にかけるということが特に印象に残りました。大学のゼミで当事者研究という自分自身の生きづらさについて研究していることもあり、私が経験したことのないようなことや創造し得ないことを体験している子どもに出会うことや、生きづらさを抱えている子どもに出会うことは多いと思います。だからこそ、子ども一人ひとりを理解し、受け止めようとする心や姿勢を持ち続けたいと改めて思いました。
- 最後のセミナーを受けさせていただいて、特に3つの大切なこと「命を預かる」「信頼」「どの子ども必ずよくなるという確信を持ち続ける」という言葉が印象に残り、同時に、教師をめざすという夢を抱くだけでなく、今まで以上に、なぜなりたいたのかという強い意志と覚悟を持つことが今も私にとっての課題のひとつだと感じました。そして、まずは人として「優しさ」「一生懸命さ」「出会いと触れあい」を大切にしていきたいと思いました。

今年は受験の年になりますが、ただ受験の勉強をするだけでなく、人間性を高められる年にしたいです。ふくまる教志塾は、教師になるためのセミナーだけではなく、人として成長させてくれる場所でもありました。1年間ありがとうございました。
- 1年間、あっという間に過ぎていったように思います。振り返ってみると、たくさんの先生方と、子どもたちと、そして教師をめざす人たちと関わっていったなと思いました。いろんな考え方を持つ人たちと話をしたり、真剣に向き合ったりしたりしていく中で、自分自身の中身も変化していったり、新しい考え方ができるようになったりしました。教師は役者なんて言葉を聞いたりもしましたが、先生と児童という関係だけでなく、人と人との関係であるということを忘れずにいたいと改めて思いました。

どんな職業についても、どんな環境に行っても、子どもや人から憧れてもらえる素敵な人間をめざして日々努力していこうと思います。1年間ありがとうございました。
- 明石先生の講演を聞く機会を今年も得たが、改めて、「教育」という仕事、「教師」という仕事とはどういうものなのかということを知ることができた

ように思います。たとえば、「明るく元気で、優しくも厳しく、どの子もえこひいきしない、知的な先生」が子どもに好かれるという話を聞いたとき、子ども一人ひとりを大切にする教師になれるように、これからも多くのことを学んでいきたいと思いました。そして教師は、「この子は必ず良くなる！」という思いを持ち続けることが大切であるという話、この思いをこれからも忘れることなく、現場で頑張っていきたいと思います。

- 何をするにもまず知らなければならぬと強く思った。子どもたちや保護者だけではなく、ともに働く仲間のことを知ることが大切だ。自分ひとりの考えだけでことを起こすのでは、配慮が足りなかったり、力が足りなかったり、様々な未熟な点が出てくると思う。そこで、周りを知り、ともに力を合わせて行動できるようにしたい。孤立する子どもや保護者をなくし、全員で子どもたちの成長を支えていけるようにすることが大切だ。

教師という仕事は、子どもを伸ばし、生かすことのできる仕事だ。しかし、方法や関わり方を誤れば、子どもたちの可能性を摘み、殺してしまう恐れもある。責任ある仕事だということを胸に刻みつけて歩んでいきたい。